

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02042

研究課題名(和文) 接続法を中心とするヴェーダ語叙法の研究 文法研究と思想研究の融合を目指して

研究課題名(英文) A study of the subjunctive and the other moods in Vedic on the basis of mutual understanding between grammar and thought

研究代表者

堂山 英次郎 (Doyama, Eijiro)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：40346052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ヴェーダ語動詞において話し手の態度を表示する叙法、特に接続法の語形・機能を、文法と思想の相互理解に基づいて研究した。接続法語幹形成母音や3人称複数形の同定といった長年の課題に取り組む一方で、インドの伝統文法学による接続法の理解、更には従来曖昧に理解されてきた従属節における叙法の機能についても、一般言語学的観点から根本的問題の所在と解決のための道筋を示した。また、叙法の機能研究のための十分な用例収集と分析を行い、今後の包括的研究のための着実な基礎固めを行うとともに、言語研究と思想研究の表裏一体性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はまず第一に、ヴェーダ語の接続法や叙法全般の機能研究を大きく進展させた。特に、従来漠然と使われたきた機能分類の見直しと新たな観点の導入を迫ったことは、一般言語学にも寄与するものである。また、叙法を基軸に行ったテキスト解釈は、文献言語の厳密な理解がその思想内容の理解に及ぼす影響を、つまりは言語・思想の一体的研究の重要性を浮き彫りにした。思想史が原典の翻訳とその理解から描き出されることを考えれば、一般書による社会への発信において本研究が持つ基礎研究としての意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：This study explored the forms and functions of the subjunctive as well as the other moods in Vedic on the basis of mutual understanding between grammar and thought. First, I worked on the long-desired clarification of the original form of the Indo-European subjunctive suffix and identification of the 3rd plural forms. As the functional study, I made clear how Panini and his followers interpreted them in his/their work(s). But most importantly, I pointed out fundamental problems about functions of the subjunctive in the so-called “subordinate clause” and demonstrated a possible solution to it from the viewpoint of general linguistics. In the course of the study, I collected and analyzed sufficient examples to promote the comprehensive study of the functions of the Vedic moods including the subjunctive in the future. Thus doing, I also showed that the research into the language and thought should and can only be carried out with each other.

研究分野：インド・イラン学、ヴェーダ学、言語学

キーワード：接続法 叙法 リグヴェーダ ヴェーダ アヴェスタ 一般言語学

1. 研究開始当初の背景

文法はテキストを読むための道具であるが、一方で文法の大半、即ち形態統語論及び統語論に関わる諸現象の解明は、テキストの正しい理解を前提とする。文献学は本来これら言語と内容・思想とを総合的に扱うものであるが、近年の専門の細分化に伴い両者の連携は希薄となり、これが文献の正しい読解にも影響を与えている。こうした認識のもと、研究代表者は、ヴェーダ語文法の中でも厳密なテキスト読解が伴うべき文法現象として、動詞の機能範疇の一つで話し手の態度を表す叙法 (mood) に注目してきた。中でも、話し手の積極的な態度表明である点と、他 (希求法・命令法) に比べて最も研究が遅れている点から、接続法 (subjunctive) の機能を解明することが、ヴェーダ語ならびにヴェーダ思想の研究発展にとって喫緊の課題であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、まず第一に、叙法が最も豊富に用いられるヴェーダ語最古の聖典『リグヴェーダ』(RV)を中心に、姉妹言語アヴェスタ語の資料や、RVより後の諸文献にも調査範囲を拡大しつつ、接続法の語形と機能とを包括的に調査・記述することにある。その過程で、接続法がどのような具体的場面で使われ、また他の叙法とどのような相関関係にあるのかを明らかにすること、また更には、詩人・祭官や神々の発言・会話に見る叙法の機能から、話し手と聞き手の関係性やその社会的・宗教的背景を考察することである。これによって、接続法および叙法の一般的理解を促進するとともに、本来一体であるはずの言語と思想の研究が、相互補完的にヴェーダの言語・文化の理解に直結することを示すことが最終的な目的である。

3. 研究の方法

上記の目的のため(1) 同定済みの、また新たに調査予定の接続法語形の用例について、文法・文脈・発話状況などのあらゆる情報を収集しデータ化する。曖昧語形についても用例を全て読解し、同定の可・不可を決定する。適宜、比較言語学的な考察やアヴェスタ語の接続法の調査も行う。(2) 接続法の機能を実例の中で考察するために、会話形式の讃歌を中心にテキストサンプルの収集・分析を行う。その中で、接続法の機能を希求法や命令法等のそれとの関係性の中で考察する。(3) これらの分析結果を総合的に考察する。特に(1)に基づき、接続法が後に衰退し、希求法や命令法が残ったことに関して、接続法の機能の歴史的変遷を調査することと、(2)に基づき、話し手と聞き手の関係性や、その社会的・宗教的背景を考察することに重点を置く。

4. 研究成果

上記3.の課題番号に対応して記述する。

(1) RVにおける2・3人称の接続法語形について、個々の用例箇所の読解を進めた(1人称は調査済み)。その際、各語形について、動詞語根(±前接辞)、時制幹、人称、数、語尾の種類、態、語根・語幹に備わる意味などの形態論的基本情報と、否定文・肯定文の別、疑問文・平叙文の別、また従属節では条件節、目的節、関係節等の別といった文型の基本情報、更には韻律や、文脈や発言状況といった語用論的要素に関しても、細かい区別を設けてデータ入力した。データは、これら様々な条件によって適宜取り出し、機能の考察に使えるようにしてある。ただし、不確定要素が残る中でデータは完璧ではないため(以下参照)、データのHPでの公開は先送りした。しかしながら、それら諸問題の解決を急ぎ、近いうちに公開したいと考えている。その暁には、同定の判断に機能的側面が十分に考慮されていなかった M. Meier-Brügger (1981) *Konjunktiv und Optativ im Rigveda* (教授資格論文 Zürich) を大きく更新することになり、接続法、そして叙法全体の精度の高い研究を可能にするデータが世界で共有されることになると期待される。

一方、従前から取り組んできた形態上の大問題として、3人称複数語形の多義性が挙げられる。これについては、2014年秋の日本歴史言語学会第3回大会で問題点の整理と解釈のための提案を行っていたが、その後の議論や意見を含め検討し直した。その結果、3人称複数語形については、确实語形の形態的・統語的検討が終わった段階での再検討が不可避であると考えられたため、当初予定していた論文等における発表は見送った。他の人称の一部にも言えるが、叙法においては、純粋に形態的に同定が困難な場合、不確定語形を最後まで残しておき、その後の機能論の研究の進展を繰り返しフィードバックさせながら少しずつ同定の精度を上げ、最終的に同定の可・不可を決定する必要がある。これは、研究代表者が過去に1人称接続法の場合にも行った方法論であるが、3人称複数語形の場合には更に複雑な問題が絡んでいることが判明し、最終的な同定の判断は持ち越すこととなった。しかしこれも、近いうちに同定の可・不可を決定し、上記データの中に反映させる予定である。

RVより後の文献における接続法の調査については、予想通り、文法範疇としての同法が急速に衰退したことに対応して、主文・主節においては1人称語形の、しかも意思表明の機能が圧倒的に多いことや、また従属節の中では目的節や条件節を中心に定式化した使用が目立った。前者の観察は、主文における希求法の機能の拡張や、その他の文法的装置による古い接続法機能の分散という問題につながり、その考察の過程で、以下(3)に見る成果が得られた。

イランのアヴェスタ語に見られる接続法については、近年の研究成果を踏まえた上での接続法語形の同定が未だ手付かずであることに鑑み、形態論上の問題点の整理と語形の同定作業を中心に検討・考察を行なった。その過程で、印欧祖語の接続法接辞における Laryngal の有無の間

題に取り組むことになったのは予定外ではあったが、接続法の理解を大きく前進させる良い機会となった。即ち、これまで散発的に、印欧祖語の接続法接辞を**-He-/-Ho-*とする考え方が、古アヴェスタ語の韻文テキストにおける音節計量にのみ基づいて主張されてきた。しかしながら、関係する全用例を再検討した結果、この現象は、語根が**-aH-*に終わる語幹の接続法語形からの類推により、アヴェスタ語内部で二次的に広まったものであることが明らかになった。この成果は、2016年11月20日日本歴史言語学会第6回大会（九州大学）において「印欧祖語の接続法接辞について 古アヴェスタ語資料の検討」と題して発表した。これは当初、同学会の機関誌に日本語で投稿予定であったが、国内のヴェーダ学者や印欧語学者から、印欧語学にとっての重要性から欧米の印欧語の学術誌に発表すべきとの要望を受け、内容を更に拡充して発表を準備している。印欧祖語の動詞組織の再構築は多くの印欧語学者が関心を持つが、上記研究はその1ピースを埋めるものであり、その影響は甚大であると予想される。一方、アヴェスタ語接続法の機能的考察も行ったが、本来的な資料的制約から、RVにおける接続法とは異なる機能等を見出すには至っていない。

(2) 会話形式の讃歌としては、RV I 165（インドラとマルツたち）、III 33（ヴィシュヴァーミトラと河川）、IV 18（インドラの出生：インドラと母）、X 10（兄妹婚の歌：ヤマとヤミー）、X 51（アグニの逃避：アグニと神々）、X 95（ブルーラヴァス王と天女ウルヴァシー）、X 108（雌犬サラマーとパニ族）を読解し、翻訳・注釈を付した。その中で接続法の機能について考察を進めた結果、いわゆる主文や主節における機能と従属節における機能との間で、研究の進み方に大きな違いが出た。前者については、これまでの研究でも明らかになっていた諸機能 話し手の意志表明と、未来に対する話し手の確信 が概ね確認された。特に会話形式の讃歌は、単なる会話というより、議論や駆け引きなどの強い話し手の態度表明が伴う場合が殆どである。その際接続法は、威圧、挑発、脅迫、侮蔑、皮肉など様々な形で、話し手の姿勢や感情を表現するための装置として使われていることが確認された。同様の側面は他の叙法にもあるものの、それらに比べると、接続法は遥かに強くこうした心的態度を表していると言える。

一方、従属節における接続法の機能についても研究を続けてきたが、そもそも従属節とは何なのか、そしてそこに使われる叙法がいかなる機能を持つのか、という根本的問題を解決しなければ、機能的分類も考察も砂上の楼閣に帰する可能性の高いことを痛感した。よって、研究期間の後半はこの問題の解決に多くの時間と研究を割いた。その研究成果については以下(3)に譲る。

通常の形式のRV讃歌としては第6巻の数十歌篇を選んで詳細に検討したが、会話形式の讃歌から得られた成果以上のことは得られなかった。しかしながら、それらはRVの言語と思想に関する多くの発見や課題をもたらし、これらは研究代表者が現在共同執筆中のRVのドイツ語訳注に反映させる予定である。当翻訳は、K. Geldner 訳（1951）以来の本格的ドイツ語訳であり、その学術界に与える影響が甚大であるのは、公刊済みの同翻訳第1巻により実証済みである。

以上の接続法や叙法を中心としたテキストの読解・検討とは別に、種々の文献学的研究を発表し、本研究全体に通底する言語研究と思想研究の融合を示すべく努めた。材料の範囲としては、本研究分野の対象文献に対応して、RVのみならずヴェーダ散文文献、またインド・イラン的視点からアヴェスタ語の資料を扱った。また題材の内容としては、研究代表者が別途研究を進める神話研究を中心に、また国際的発信という点からは、英語での執筆および発表に努めた。

(3) 上記(2)で述べたように、接続法の機能の考察の過程で、従属節における接続法や叙法の機能のあり方を根本的に考え直さなければならない必要性が、そしてそのためには、文や節といった基本的概念について、一般言語学的視点も含めて根本的に見直す必要性が生じた。この問題を意識するきっかけとなったのは、2017年7月8日日本務校で行われた「体言化」プロジェクトの国際シンポジウム「第3回 Nominalization Festival」で行った発表「サンスクリット語における形容詞の扱いについて」である。ここでは、サンスクリット語における「名詞」「形容詞」といった概念について考察し直す機会を得たが、それが結果的に、同言語における名詞的概念全般についての見直しへとつながった。その結果、伝統的に「従属節」と呼ばれるものが、事態が体言化（名詞化）したものに他ならないという体言化の理論が、サンスクリット語においては、従属接続詞の成り立ちやアクセントの特性によって極めて見えやすい形で現れていることが判明した。これにより、いわゆる「従属節」の中では話し手の直接的な心的態度を表し得ない、または表しにくいという点が明確になり、「従属節」における叙法の機能を根本的に見直さなければならないことが見えてきた。この成果は「サンスクリット語の「名詞」を再考する Nominalization の視点から」と題して、2020年度の科研費出版助成を受けた『体言化理論の新展開と言語の分析』（鄭聖汝・柴谷方良編）の一章として出版予定である。また同様の議論を、より多くのヴェーダ語の文法現象に結びつけた上で、「*yád, yadā, yádi, and the 'Subordinate Clause' in Vedic*」と題する発表を、2019年8月23日クロアチアで行われた国際ヴェーダ学会で行った。その際の反響は大きく、多くの質問・議論が行われたが、基本的な考え方については多くの賛同を得た。今後この議論をより推敲しつつ、英語論文としてより多くの研究者に向けて発信する予定である。それにより、ヴェーダ語における「文」や「節」、また「形容詞」や「動詞」といった根本的概念の位置づけについて大幅な見直しを迫るとともに、未だに曖昧なままである接続法の分類や機能について大きな見直しと新たな知見がもたらされるものと期待される。

(1)の成果と関連して:接続法の語形や機能の文献・時代による偏りから、その通時的な変遷、即ちサンスクリット文法史の大事件である接続法の衰退が如何にして起こったのか、そしてその本来の機能がどのように継承・吸収されたのかについて考察した。基本的な変遷のアウトラインは、L. Renou *La décadence et la disparition du subjonctif* (1937) の記述から大きくは逸脱しないが、本研究では特に、時代を追って逆に機能領域を広げていった希求法と、接続法の関係に注目した。その際避けて通れないのが、インドの伝統文法(パーニニ文法)における接続法の扱われ方である。パーニニの *Aṣṭādhyāyī* は接続法の機能を希求法によって説明しており、これが具体的に接続法のどの機能を想定しているかについて調査することが、ヴェーダの接続法とこれを失った古典期サンスクリット語とをつなぐ言語状況を知る手がかりとなり得るからである。ヴェーダにおける接続法と希求法、そしてパーニニの規定する希求法の機能を詳細に比較・考察した結果、接続法の「意志」の用法と「見込み(未来)」の用法の多く(しかし全てではない)が、確かにパーニニの規定する希求法の諸機能に対応していることが確認された。しかも、それらの用法を示すヴェーダの用例の多くは、本来的な両叙法の区別を知らなければ両者を混同し得る文脈を示すことも分かった。この成果は「Pāṇ. III 4,7—8 が規定するヴェーダ語接続法の機能について」と題して2018年12月22日にインド思想史学会第25回学術大会(於 京都大学楽友会館)で発表したが、その後の議論を受けて推敲を重ね、“The Vedic subjunctive prescribed in Pāṇ. III 4,7”として、海外のインド伝統文法の第一人者の記念論集に寄稿した(現在編集中)。これによって、パーニニの言語における接続法の位置づけと、闇に包まれてきた接続法の衰退の過程の一角に光が当たり、パーニニを介した同様の研究を、他の様々な動詞範疇の通時的研究においても推進する契機になると期待される。

一方で、RVより後の時代(特に散文の時代)に、衰退した接続法の意味領域がどのように表されたのかという問題は、他の叙法との間にだけ想定されるのではない。主文・主節における希求法は通常、ヴェーダ期でも古典期でも願望や可能性を表す機能しかないが、これが特定の小辞や副詞とともに用いられると、接続法に非常に近い機能を担うと思われる例が存在する。パーニニの記述の中では、*uta* や *api* がそれにあたるが、その他に本研究で明らかになったのは、副詞 *sáśvat* である。この語の全用例の調査から明らかになったのは、これがヴェーダ散文以降、典型的には帰結を表す文に用いられた場合に、動詞の種類に限らず話し手の強い確信を表し得る、という事実である。これは古い接続法の機能に相当し、同法が同機能で使われることの無い時代には、この表現が接続法の機能の一角を肩代わりしていた可能性がある。この研究結果は、2015年6月30日に第16回国際サンスクリット学会(バンコク、タイ)において“*The Vedic adverb sáśvat*”と題して発表した。この発表も諸々の質問と議論につながったが、帰国後にも他の知らない学者から問い合わせがきたりと、反響が大きかった。

(2)の成果と関連して:主として会話における叙法の機能・用法の分析を通じて、話し手と聞き手の間の様々な人間関係(人神関係)について考察した。全体として、叙法を用いた心的態度の表現はあらゆる人物間で等しく用いられることが観察される。例えば4(2)に挙げたサンプルでは、RV I 165でインドラ(神)とマルツたち(神)が、III 33でヴィシュヴァーミトラ(人)と河川(神)が、X 10でヤマ(人)とヤミー(人)が、X 95でブルーラヴァス(人)とウルヴァシー(天女)が、X 108でサラマー(動物)とパニ(人)が交わす会話の中では、接続法、命令法、希求法が、人・神・動物等といった身分的区別に関係無く同様に使われていることが分かる。つまりこれらの例では、会話の参加者同士は基本的に対等な関係にあり、それがその時々々の場面において、言葉による駆け引きを通して個別の微妙な関係性を作り出しているものと思われる。特に接続法は、緊迫した交渉や駆け引き(I 165, III 33, X 95, X 108)において、4(2)で見たような極めて強い心的態度の表明に使われており、話し手・聞き手の身分に関係なく、むしろその場における身分を決定づけるための「武器」として使われているとさえ考えられる。

以上の考察は、言語をあるがままに読む時に初めて、生の話し手・語り手の息遣いが現れることを表している。一般に知られる(ただしまだ誤解されることの多い)RVにおける神々と人間との間の Give-and-Take の関係も、上記のように動詞の機能を正しく理解して初めて得られる結果である。これは日本語で翻訳・研究する場合には特に重要である。多くの日本語訳が、敬語や丁寧語を使って「格調高く」RVを翻訳しようとしてきたが、その際に正しい意味やニュアンスを犠牲にしてきた部分は決して少なくない。古代文化の社会的背景や宗教思想が殆ど文献にのみ基づいて構築されることに鑑みれば、そうしたバイアスのかかった翻訳は致命傷になりかねない。言葉の厳密な理解は、それによって表される思想内容の理解をもたらすし、また一方で、思想の理解が進めば言語の理解も一段と進む。これが、本研究が目指した「言語研究と思想研究の融合」である。本研究では、こうした文献学の本来の姿を最も例示しやすい文法範疇として、接続法を始めとする叙法を取り上げた。接続法の包括的研究を最終的な形にするまでには至らなかったが、当初の目的は十分に達成したと言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Eijiro Doyama	4. 巻 1
2. 論文標題 The Vedic subjunctive prescribed in Paan. III 4,7	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Festschrift for Professor G. Cardona (tentative title) (ed. by P. Scharfe)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Eijiro Doyama	4. 巻 1
2. 論文標題 Reflections on YH 40,1 from the perspective of Indo-Iranian culture	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Aux sources des liturgies indo-iraniennes (ed. by C. Redard, J. Ferrer-Losilla, H. Moein, & Ph. Swennen)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Eijiro Doyama	4. 巻 1
2. 論文標題 The Vedic adverb sasvat	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the 16th World Sanskrit Conference, June 28-July 2, 2015, Bangkok, Thailand (tentative title) (ed. by J. Houben)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 堂山英次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 サンスクリット語の「名詞」を再考する Nominalizationの視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体言化理論の新展開と言語の分析 (鄭聖汝・柴谷方良編)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村悠人・堂山英次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 古代インドにおける語源学について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム (藤井正人・手嶋英貴編)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堂山英次郎	4. 巻 2
2. 論文標題 古代インドの捨て子伝説 その特徴と象徴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム (藤井正人・手嶋英貴編)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eijiro Doyama	4. 巻 1
2. 論文標題 A syntactic and semantic study of Indo-Iranian *mans dhava	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Living Traditions of Vedas (ed. by P. Vinod Bhattathiripad, Shrikant Bahulkar)	6. 最初と最後の頁 39-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村悠人、堂山英次郎、高橋健二	4. 巻 14
2. 論文標題 神の名の意味を知ること 神名アグニの分析に見えるヤースカの語源学と神学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 南アジア古典学	6. 最初と最後の頁 177-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eijiro Doyama	4. 巻 1
2. 論文標題 Ksetrasya Pati and Mandhaatar	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Vedic Saakhaas: Past, Present, Future (ed. by J.E.M. Houben, J. Rotaru & M. Witzel)	6. 最初と最後の頁 935-954
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堂山英次郎	4. 巻 64
2. 論文標題 インドラへの懐疑と信 RV II 12,5	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 261-268
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Eijiro Doyama
2. 発表標題 yad, yadaa, yadi, and the 'Subordinate Clause' in Vedic
3. 学会等名 The 7th International Vedic Workshop (Dubrovnik, Croatia) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eijiro Doyama
2. 発表標題 How to be a hero in ancient India Unusual birth and abandonment of children
3. 学会等名 12th Annual International Conference on Comparative Mythology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 ジャムシード王の悲劇 インド・イラン的視点から
3. 学会等名 第52回関西イラン研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川村悠人・堂山英次郎
2. 発表標題 神の名の意味を知ること 神名アグニ (agni) の分析に見るヤースカの語源学と神学
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム」の第5回シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 サンスクリット語の「名詞」を再考する Nominalizationの視点から
3. 学会等名 鄭聖汝・柴谷方良編『体言化理論の新展開と言語の分析』（仮名；2020年出版予定）第2回論文合評会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 Paan. III 4,7 8が規定するヴェーダ語接続法の機能について
3. 学会等名 インド思想史学会第25回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Eijiro Doyama
2. 発表標題 Translating Rigvedic India
3. 学会等名 Workshop: Ancient Indian History as seen in the Oldest Indian Texts, Rigveda & Sangam (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 神話の起源と伝承について 捨て子伝説に関する一考察
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第3回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 サンスクリット語における形容詞の扱いについて
3. 学会等名 平成29年度大阪大学国際共同研究促進プログラム主催・待兼山ことばの会共催シンポジウム Nominalization Festival 3 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 育む母と奪う母 インド神話における母の表象とその継承
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第68回学術大会, パネル「『越境』するヴェーダ研究 ヴェーダ文献研究の方法と広がり」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 古代インドの捨て子伝説をめぐって
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム」第3回シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 8番目に生まれる話
3. 学会等名 第8回ヴェーダ文献研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Eijiro Doyama
2. 発表標題 Reflections on YH 40,1 from the perspective of Indo-Iranian culture
3. 学会等名 International Colloquium: Aux sources des liturgies indo-iraniennes (To the Sources of the Indo-Iranian Liturgies) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 印欧祖語の接続法接辞について 古アヴェスタ語資料の検討
3. 学会等名 日本歴史言語学会第6回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 インドラが歌う
3. 学会等名 ヴェーダ文献研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 堂山英次郎
2. 発表標題 インドラへの懐疑と信心 RV II 12,5
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第66回学術大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Eijiro Doyama
2. 発表標題 The Vedic Adverb sasvat
3. 学会等名 The 16th International Sanskrit Conference (国際学会)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----